沖縄国際大学社会文化研究　Vol. 9, No. 1　2006年３月

民家景観からみるヤンバルの集落

—1988年の国頭村における集落調査から—

崎浜　靖

Houses Landscape on Yambaru Settlement in 1988

— Case of kunigami village —

Yasushi SAKIHAMA

１．はじめに

日本における集落地理学の研究は、古くから農村集落を対象にした研究が多く蓄積されている。ことに戦前から戦後にかけては、農村集落の景観研究に関するモノグラフが多く報告されている[(1)]。これらの研究を一瞥すると、風土論的・景観論的アプローチによる研究手法が比較的多くみられ、村落景観から村落構造を関連づけた総合的な研究が多いといえる。しかしながら、高度経済成長期を経て、社会・経済的構造が大きく変わったこの四半世紀の間に、総合的に地域を把握する地理学の景観的研究はむしろ減少している観が強く、民俗学や建築学、歴史学などの隣接分野において景観的研究が増加し、地図・空中写真などを多用した研究手法も増加している[(2)]。

一方、沖縄における集落の景観的研究については、仲松弥秀、田里友哲、小川徹をはじめ多くの蓄積がある。しかも、いずれの研究も景観研究が主な目的ではないが、集落の歴史性を踏まえた立地・形態などの景観的特性と住民の社会階層（旧士族・旧百姓）との関係性、さらには御嶽（うたき）の立地と村落共同体との関係性など、集落の空間構造を把握する上で欠くことのできない景観論的・形態論的アプローチが展開されている[(3)]。

しかしながら、戦前から戦後にかけての景観の変化や復帰後から現在に至るまでの社会・経済的構造の変化は、狭小な沖縄の地理的空間に大きな痕跡を残しているが、一部の研究者を除いては正面から景観構造の変容を論じた研究は少ないというのが実状であろう。本稿では、先学の業績を踏まえ、沖縄本島北部国頭村を研究地域として取り上げ、文化地理学的な視点からヤンバル地域の集落景観を検証してみる。なお、本稿の資料の多くは、1988年（昭和63年）８月～９月にかけて行ったフィールド調査に基づいて作成してある[(4)]。特に本稿では、フィールド調査で得られた知見を重視する意味で、民家の分布・形態から集落景観を読みとる方法に

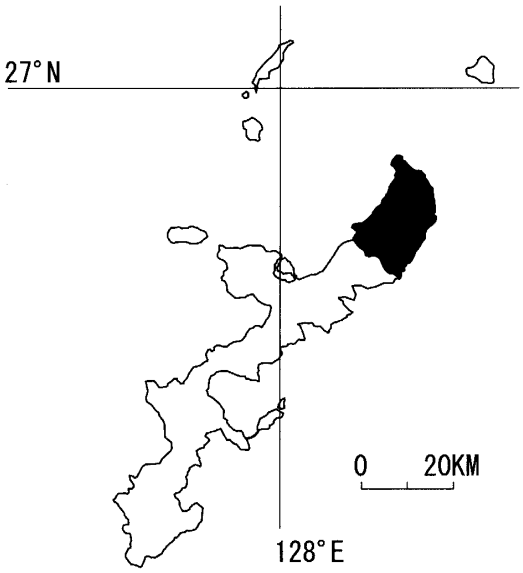
重点を置き、ヤンバル地域の集落景観の特徴を検討してみる。

2．研究対象地域の概要

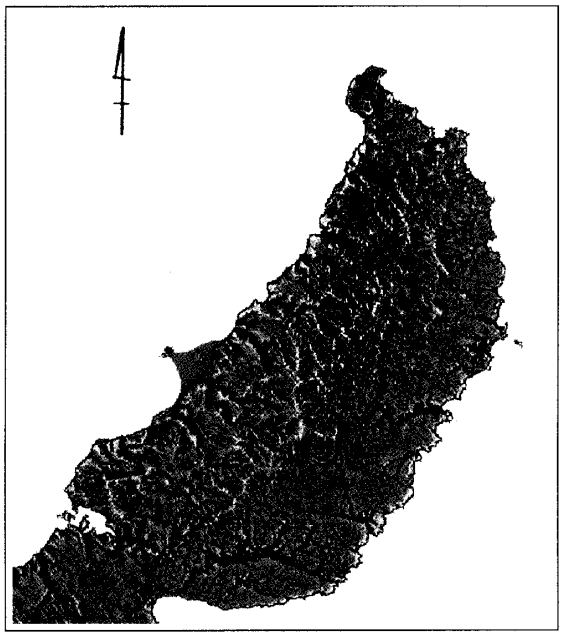
研究対象地域の国頭村は、沖縄本島の最北部に位置し、西南部には大宜味村、東南部には東村が位置する（第１図）。国頭村は東西16km、南北21kmあり、面積は194.80km^{2}と県内市町村では４番目に大きな面積を有する村である。地質は、国頭礫層・粘板岩土壌・古期石灰岩・沖積土壌が広く覆い、沖縄本島最高峰の与那覇岳（503m）をはじめ、伊湯岳（446m）、西銘岳（420m）と山地性の地形が展開する。河川も県内では比較的大型の河川が山地を開析し、下流部では、集落の多くが立地する沖積低地が分布する（第２図）。

2005年３月現在の国頭村は、5,763人の人口を有し、調査を実施した時期に近い1985年（国勢調査）では、6,510人（男3,316人、女3,194人）を数えた。終戦直後の1950年の人口は12,000人を超えており、その後に本島中南部の都市地域を中心に多くの人口流出がみられた。特に中心地である辺土名を除く農村集落では、多くの若年層人口の流出がみられ、高齢化も進展している。

国頭村の集落は、山地性の地形環境であるため、海岸線に沿った沖積低地に大半の集落は分布する。集落の歴史をみると、西海岸に分布する浜・比地・奥間・宇良・伊地・与那・謝敷・佐手・辺野喜・宇嘉・宜名真・辺戸などの各集落と、東海側に面する奥・安田・安波などの各集落は、古琉球時代に成立が確認されている。一方、桃原・鏡地・半地・伊江・伊部・美作などの小集落は、近世以降に首里・那覇からの旧士族を主とする移動者によって形成された屋取集落である[5]。



第１図　国頭村の位置


（渡邊康志氏作成）
第２図　国頭村（ヤンバル）の地形環境

3．研究方法

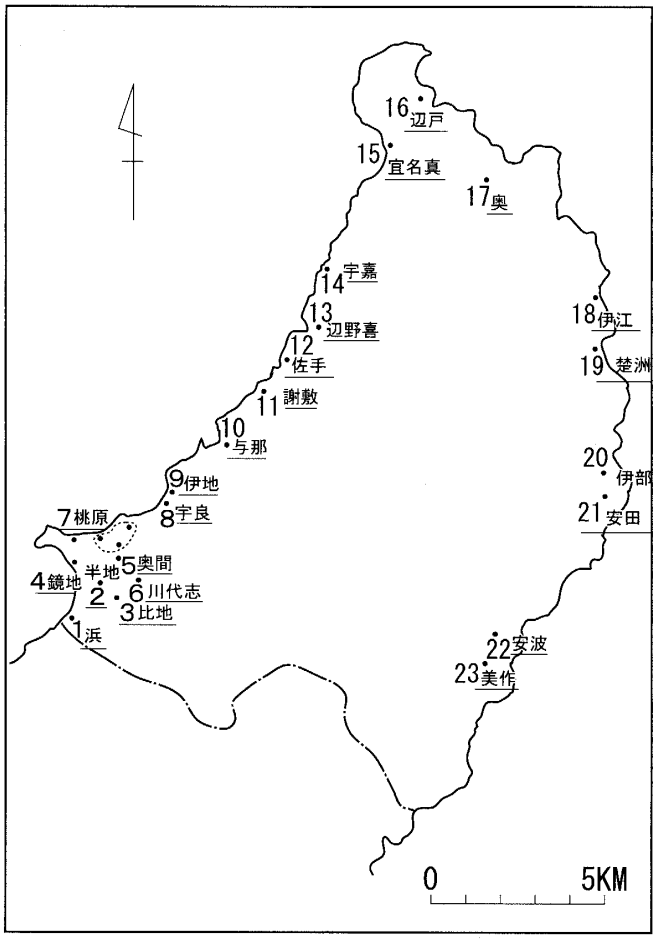
国頭村の集落景観を調査した大きな理由は、沖縄本島内では最も古い民家が分布していることと、村落内での地域的差異（景観的差異）や景観変容プロセスの認識が可能であると考え、調査を実施したものである。

国頭村は20の字があるが、本稿では、国頭村の中心地（市街地）である辺土名区（辺土名・兼久・上島）を除いた、小字を含むまとまりのある23集落を調査対象地域としてある（第1表・第3図）。

第1表　集落と字の対応関係

	集落名	字名	調査集落		集落名	字名	調査集落
1	浜	浜	*	14	謝敷	謝敷	*
2	半地	半地	*	15	佐手	佐手	*
3	比地	比地	*	16	辺野喜	辺野喜	*
4	鏡地	鏡地	*	17	宇嘉	宇嘉	*
5	奥間	奥間	*	18	宜名真	宜名真	*
6	川代志	奥間	*	19	辺土	辺土	*
7	桃原	桃原	*	20	奥	奥	*
8	兼久	辺土名	−	21	伊江	楚洲	*
9	上島	辺土名	−	22	楚洲	楚洲	*
10	辺土名	辺土名	−	23	伊部	安田	*
11	宇良	宇良	*	24	安田	安田	*
12	伊地	伊地	*	25	安波	安波	*
13	与那	与那	*	26	美作	安波	*

＊調査を行った集落



第3図　集落分布図

研究方法は、文献調査とフィールド調査を併せて、①集落の分布と歴史、②集落の立地環境、③民家の方位と形態、④屋敷内の塀・付属物の分布状況などについて、検証作業を行った。

本稿では、主に③④に関する事柄を中心に分析を試みる。

調査内容は、ゼンリン㈱の住宅地図をベースマップとして、フィールド作業で得られた空間データを地番地図に記入する作業を行った。フィールド調査の内容は、①民家（主屋）の方位、②家屋の形態（外壁・屋根材料）、③屋敷内の塀・屋敷林の分布について、全戸悉皆調査を行った。調査対象集落は20字の23集落、1,434戸の民家調査を行った。本稿では、特にこれらフィールド調査の結果を基に、1988年における国頭村の集落景観を検証してみる。

4．民家景観からみる地域特性

(1) 民家（主屋）の方位

23集落の民家調査を行うにあたり、まず主屋の方位について調査を行った。この調査では、ややおおまかながらも住宅地図には４方位に絞り記述することにした（第２表・第４図）[(6)]。

第２表・第４図をみると、調査した全戸数1,434戸のうち、南向きの方位が810戸（56.3％）あり、東向き方位の247戸（17.2％）、西向き方位の226戸（15.7％）、北向き方位（10.5％）となっている。南向き方位が卓越することは当然としても、以外にも東向き、北向きの方位が多いのは興味深い。例えば東海岸に面する安波集落と西海岸に面する与那集落については、南向き民家よりも東向き民家が多いことがわかる。東海岸に面する小集落の伊部集落（北向き57.1％）と安波集落（北向き33.3％）は、北向き民家がもっとも多くみられた。これは、集落の位置する地形（傾斜方向）などの地理的環境の制約で、このような分布状況を呈するに至ったと考え

第２表　調査集落における民家の方位

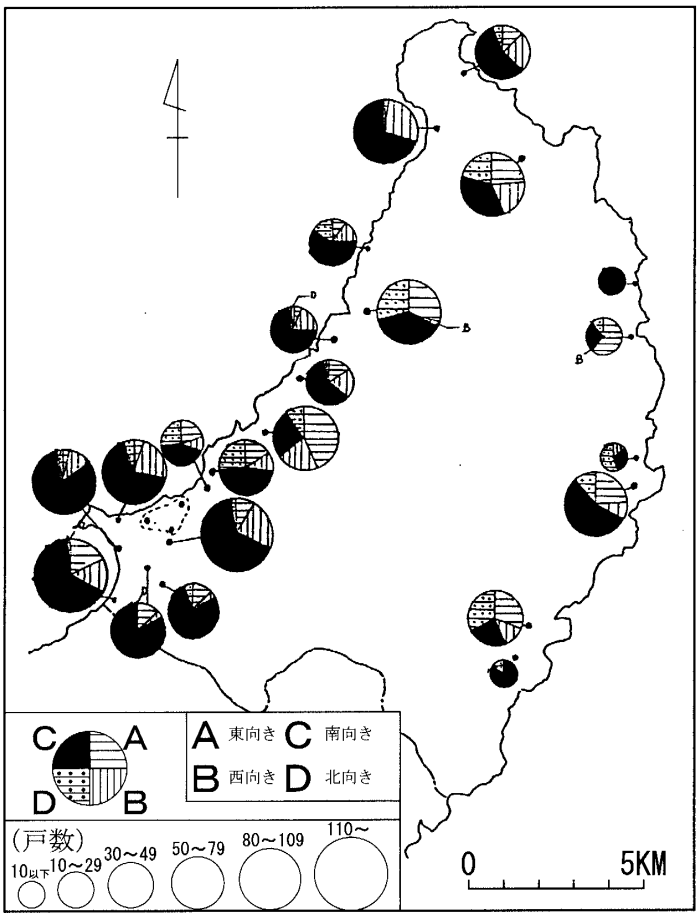
	集落名	東向き	西向き	南向き	北向き	計（戸数）
1	浜	21 (16.8)	19 (15.2)	83 (66.4)	2 (1.6)	125
2	半地	7 (13.2)	2 (3.8)	43 (81.1)	1 (1.9)	53
3	比地	7 (13)	5 (9.3)	39 (72.2)	3 (5.6)	54
4	鏡地	3 (3.2)	11 (11.6)	78 (82.1)	3 (3.2)	95
5	奥間	12 (8.8)	32 (23.4)	90 (65.7)	3 (2.2)	137
6	川代志	2 (28.6)	0	5 (71.4)	0	7
7	桃原	5 (5.0)	23 (22.8)	68 (67.3)	5 (5.0)	101
8	宇良	9 (22.0)	4 (9.8)	17 (41.5)	11 (26.8)	41
9	伊地	9 (16.1)	6 (10.7)	26 (46.4)	15 (26.8)	56
10	与那	40 (43.0)	20 (21.5)	25 (26.9)	8 (8.6)	93
11	謝敷	6 (15.4)	8 (20.5)	23 (59.0)	2 (5.1)	39
12	佐手	2 (4.3)	10 (21.3)	34 (72.3)	1 (2.1)	47
13	辺野喜	28 (29.8)	2 (2.1)	38 (40.4)	26 (27.7)	94
14	宇嘉	3 (9.1)	5 (15.2)	20 (60.6)	5 (15.2)	33
15	宜名真	2 (2.1)	27 (27.8)	68 (70.1)	0	97
16	辺戸	8 (12.7)	15 (23.8)	36 (57.1)	4 (6.3)	63
17	奥	22 (23.9)	18 (19.6)	33 (35.9)	19 (20.7)	92
18	伊江	0	0	4 (100)	0	4
19	楚洲	17 (60.7)	1 (3.6)	7 (25)	3 (10.7)	28
20	伊部	0	1 (14.3)	2 (28.6)	4 (57.1)	7
21	安田	21 (24.1)	7 (8.0)	49 (56.3)	10 (11.5)	87
22	安波	23 (30.7)	10 (13.3)	17 (22.7)	25 (33.3)	75
23	美作	0	0	5 (83.3)	1 (16.7)	6
計	戸数(%)	247 (17.2)	226 (15.7)	810 (56.5)	151 (10.5)	1,434

＊川代志は奥間に属する小字である。
＊現地調査により表を作成（1988年９月）

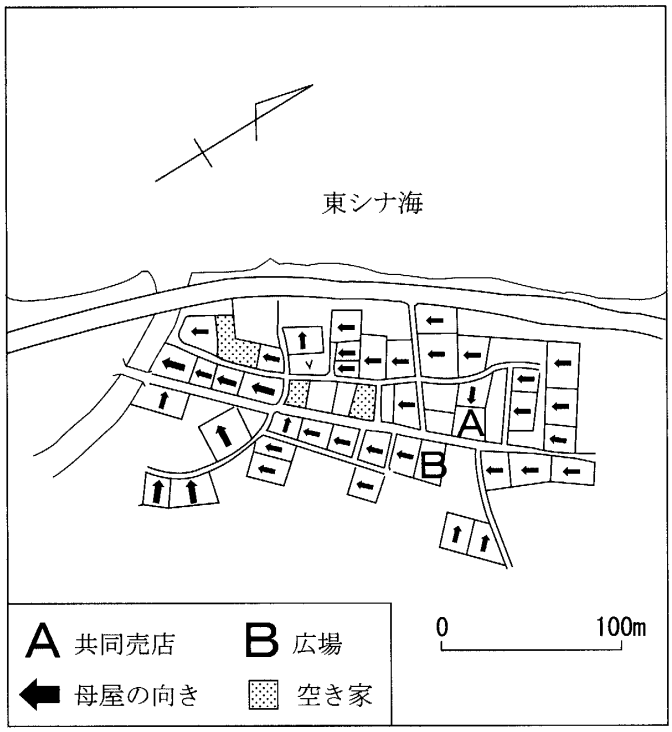
られる。これまで断定的に説明されることの多かった民家方位の南向き（南西向き）[7] について再考を促す調査結果ではないかと思われる。

このフィールド調査から、地域の住民が地形条件や微気候などの環境条件を充分に考慮して、民家の方位を決定してきたことが伺える。当然のことながら、風水判断による「知識」も重視したであろうが、それ以前に、その場所における地形条件や風向きなどにみられる「微気候」など、地域住民の伝統的な環境認識が民家方位決定の基盤にあったと推察される。例えば、「陸の孤島」といわれた安波集落では、集落の南側に山が展開する地形条件であり、北向きに民家方位を決定せざるを得ない場所にある。そのため歴史的に古いものと考えられる茅葺き屋根のある民家の多くも北向きであった。しかし、屋敷内の塀や納屋の配置状況をみると、できるだけ夏季の厳しい暑さをしのぐために、可能なかぎり涼しい風を迎え入れ、さらには冬季の厳しい北風をシャットアウトするような工夫が屋敷内の施設配置に感じられた。[8]

次に、南方位の民家が卓越している佐手集落と、谷間の複雑な地形環境に立地する辺戸集落については、個別に検討してみよう（第５図・第６図）。

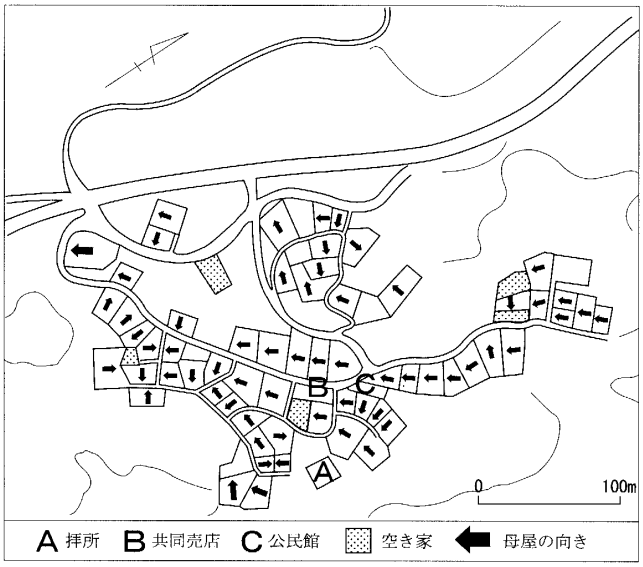


第４図　民家の方位（1988年）



現地調査より作成（1988年９月）

第５図　佐手集落の民家方位の状況



現地調査より作成（1988年９月）

第６図　辺戸集落の民家の方位状況

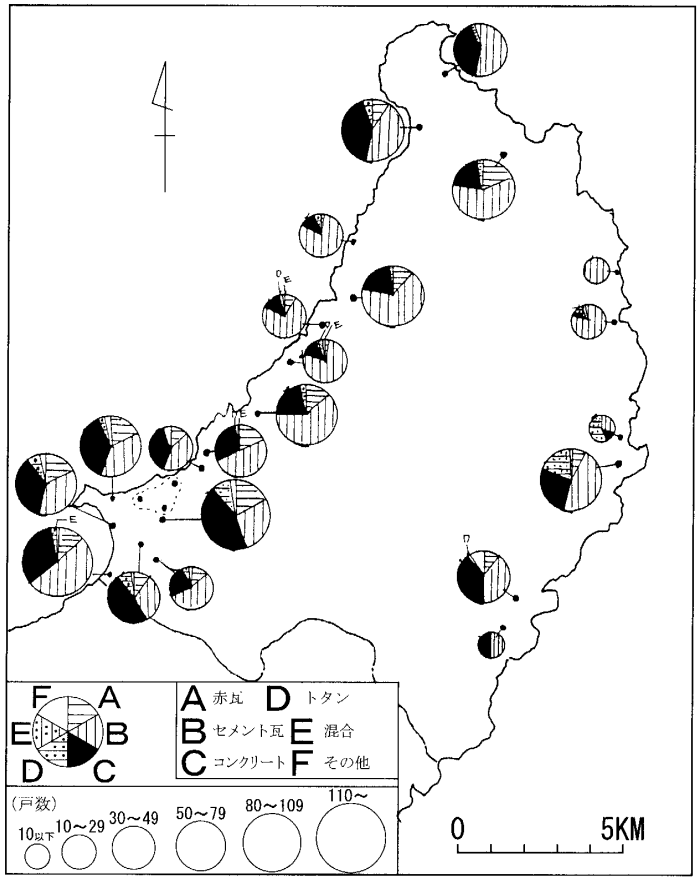
まず佐手集落であるが、古村特有の比較的整然とした南北に長い集落形態である。民家は47戸が確認されたが、そのうち34戸（72.3％）が南向きである。実際にはやや南西向きの民家が多かった。一方の沖縄本島最北端に位置する辺戸集落については、標高が90m～100mの南北の山に挟まれた谷間に集落が立地している。東側から西側にかけて傾斜する地形条件と、夏と冬に大きく変わる風向き（季節風）などを考慮した民家方位が考えられる。南向き民家が36戸（57.1％）と多いが、西向き民家15戸（23.8％）・東向き民家８戸（12.7％）となっており、４方位が混在している。日当たりや季節風を意識した民家方位であろう。

以上、民家方位の調査結果である。今後の課題としては、住民の環境認識と住宅をつくる際の「方位観」とを接合させる調査方法を検討していく必要があろう。

(2) 民家構造からみる集落景観の特徴

ここでは、集落景観を決定づける民家の分布・形態などから集落景観の特徴を検討してみよう。

第３表には、民家の壁表面材料と屋根材料などの家屋構造による分類を集落ごとに整理したものである。第７図は屋根材料による集落ごとの分布状況を地図化したものである。また第８図は、第３表をわかりやくするために、民家形態を模式化した

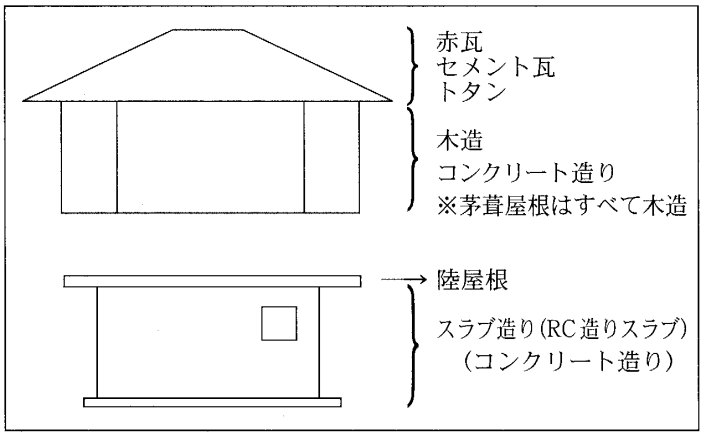


第７図　屋根材料による分布状況（1988年）

第３表　調査集落の家屋構造

集落名	調査戸数	家屋構造（壁材料・屋根材料）
1　浜	125	ス（39％）、コ・セ瓦（26％）、木・セ瓦（22％）
2　半地	53	ス（49％）、木・セ瓦（25％）、コ・セ瓦（９％）
3　比地	54	木・セ瓦（48％）、ス（20％）、木・赤瓦（13％）
4　鏡地	95	ス（37％）、木・セ瓦（20％）、木・赤瓦（13％）
5　奥間	137	ス（44％）、木・セ瓦（16％）、木・赤瓦（15％）
6　川代志	7	木・セ瓦（85％）、木・赤瓦（15％）
7　桃原	101	ス（39％）、木・セ瓦（31％）、木・赤瓦（15％）
8　宇良	41	ス（34％）、木・セ瓦（34％）、コ・セ瓦（21％）
9　伊地	56	ス（29％）、木・セ瓦（29％）、コ・セ瓦（21％）
10　与那	93	木・セ瓦（54％）、ス（22％）、木・赤瓦（14％）
11　謝敷	39	木・セ瓦（77％）、ス（13％）
12　佐手	47	木・セ瓦（45％）、コ・セ瓦（30％）、ス（15％）
13　辺野喜	94	木・セ瓦（52％）、ス（20％）、コ・セ瓦（15％）
14　宇嘉	33	木・セ瓦（73％）、ス（16％）
15　宜名真	97	ス（41％）、木・セ瓦（34％）、コ・セ瓦（12％）
16　辺戸	63	ス（41％）、木・セ瓦（38％）、コ・セ瓦（14％）
17　奥	92	木・セ瓦（49％）、コ・セ瓦（19％）、木・赤瓦（17％）
18　伊江	4	ス（75％）、木・セ瓦（25％）
19　楚洲	28	木・セ瓦（53％）、ス（29％）、木・トタン（14.3％）
20　伊部	7	ス・セ瓦（28.5％）、木・ト（28.5％）、コ・ト（28.5％）
21　安田	87	木・セ瓦（32％）、ス（28％）、コ・セ瓦（13％）
22　安波	75	ス（40％）、木・セ瓦（32％）、木・茅葺屋根（9.3％）
23　美作	6	ス（50％）、コ・セ瓦（50％）
計：1,434戸：木造・セメント瓦（509戸・35.5％）、スラブ造り（435戸・30.3％）、コンクリート造り・セメント瓦（189戸・13.2％）、木造・赤瓦（132戸・9.2％）、木造・茅葺屋根（７戸）、その他。		

※現地調査により表を作成（1988年９月）



第８図　民家形態の模式図

茅葺：茅葺屋根
セ瓦：セメント瓦屋根
赤瓦：赤瓦屋根
ト：トタン屋根

ス：スラブ造り（RC造りスラブ）
コ：コンクリート造り＋瓦（RC造り瓦屋根）
木：木造

※第３表では、RC造りスラブの民家をスラブとし、RC造り瓦屋根の民家をコンクリート造瓦屋根として分けて整理してある。

ものである。この分類は、壁表面材料と屋根材料をセットにして整理したものである[9]。

調査を実施した1,434戸の民家のうち、木造・セメント瓦の民家が509戸（36%）を占める。その次に多いのはスラブ造り（RC造りスラブ）が435戸（30%）、コンクリート造り・セメント瓦（RC造りセメント瓦）が189戸（13%）、木造・赤瓦が132戸（9%）となっている。1988年時点で、国頭村全体では、木造・セメント瓦の民家が3分の1を超えて、最も多い分布をみせている。しかし、家屋全体では、セメントで構成されているスラブ造りが、1988年時点ですでに全体の約3割に達している。

次に集落ごとの分布パターンを検討してみよう。まず、木造・セメント瓦の多い集落は、与那・謝敷・佐手・辺野喜・宇嘉・奥・伊江・安田の各集落である。西海岸にある集落と東海岸に面する集落のなかでも、中心地の辺土名集落から地理的に離れてた場所に立地する集落は、木造・セメント瓦の民家が多い傾向がみられる（写真1）。

一方、スラブ造り（RC造りスラブ）は、浜・半地・鏡地・奥間・桃原・宇良・伊地・宜名真・辺戸・奥・伊江・安波などで多くみられる。比較的、中心地の

写真1　佐手集落における木造・セメント瓦の民家（2006年3月筆者撮影）

写真2　桃原集落におけるスラブ造り（RC造りスラブ）の民家（1988年8月筆者撮影）

写真3　奥集落における木造・赤瓦の民家（1988年8月筆者撮影）

写真4　安波集落における茅葺屋根の民家（1988年8月筆者撮影）

辺土名に近い集落においてスラブ造りの民家が多い傾向がある（写真２）。また、セメント瓦・セメント造りの民家には、黒色の大和風瓦も確認された。コンクリート造り民家の特徴は、総じて都市化の影響や郊外化されつつある集落、そして若年労働者層の多い集落に多くみられる傾向があり、さらに高所得層の比率の高さにも関係していると思われる。現在の沖縄の住宅事情をみると、家の造り替えや増改築などによって、スラブ造りの民家に替える事例が大半である。それを裏返せば、高齢化率が高く、老人世帯の多い集落ほど、木造・セメント瓦、あるいは赤瓦の民家がそのまま残されるということであろう（写真３）。ちなみに赤瓦屋根の多い集落を挙げれば、奥・奥間・桃原の各集落である。また都市部への人口流出によって、位牌（トートーメー）だけを置いた空き屋敷も多くみられ、それが古い民家が卓越する要因の一つである。

また安波集落では、沖縄本島では数少ない茅葺屋根の民家が７戸確認された（写真４）。2005年３月現在では１戸を残すのみである。このような調査結果から、今後、同じよう調査を実施したならば、木造民家の減少により、スラブ造りの民家がもっとも多くみられるようになっていると推定される。

本調査より、国頭村における屋根材料の変遷を検討すると、①茅葺屋根（明治～大正期）→②赤瓦（大正期～昭和戦前期）→③セメント瓦（昭和戦前期～復帰前）→⑤スラブ造り（復帰後～現在）といったような建築様式の変遷が確認できる。これらの屋根材料の分布及び残存率を分析することで、集落の景観変化のパターンがある程度推測できる。

第４表　塀材料

集落名	塀　材　料
1　浜	ブロック塀（81%）、フクギ（10%）
2　半地	ブロック塀（84%）、植物（10%）
3　比地	ブロック塀（76%）、植物（８%）
4　鏡地	ブロック塀（71%）、植物（９%）
5　奥間	ブロック塀（84%）、植物（７%）
6　川代志	ブロック塀（66%）、フクギ（16%）
7　桃原	ブロック塀（62%）、フクギ（26%）
8　宇良	ブロック塀（71%）、フクギ（24%）
9　伊地	ブロック塀（87%）、フクギ（４%）
10　与那	ブロック塀（80%）、植物（７%）
11　謝敷	ブロック塀（96%）
12　佐手	ブロック塀（80%）、フクギ（11%）
13　辺野喜	ブロック塀（96%）
14　宇嘉	ブロック塀（91%）
15　宜名真	ブロック塀（92%）
16　辺戸	ブロック塀（86%）、植物（９%）
17　奥	ブロック塀（92%）
18　伊江	ブロック塀（50%）、フクギ（50%）
19　楚洲	ブロック塀（80%）、フクギ（８%）
20　伊部	ブロック塀（80%）、フクギ（20%）
21　安田	ブロック塀（83%）、フクギ（９%）
22　安波	ブロック塀（72%）、フクギ（17%）
23　美作	ブロック塀（83%）、植物（17%）
計	１位　２位 ブロック塀（80%）、フクギ（10%） その他（10%）

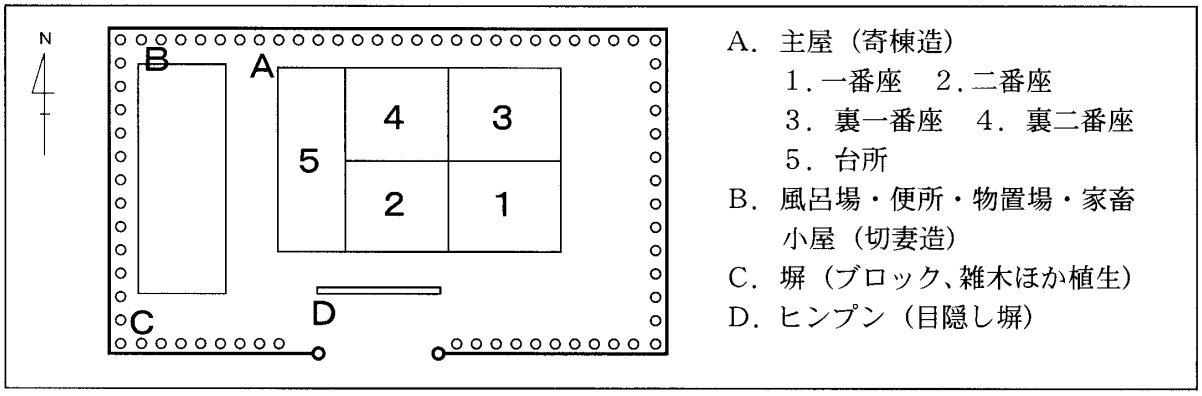
※現地調査により表を作成（1988年9月）
※３位以下は省略してある。

(3) 屋敷内の塀・屋敷林の特徴

最後に塀材料の分布状況をみていこう（第４表）。塀材料の役割は、「屋敷の境界」を示すことと「防風対策」が主であろう。塀材料は、ブロック塀、石垣、フクギ（福木）、ゲッキツ・ブッソウゲなどの植物や板などに分類できる。全体の約80％がブロック塀になっており、２番目にはフクギなどの屋敷林が10.2％

と続く。調査では圧倒的にブロック塀が多く確認され、石垣を積んだ塀やフクギなどの伝統的な屋敷林は減る傾向にあることが確認された。さらに家屋の改築にあたっては、フクギなどの屋敷林は伐採され、ブロック塀に代えられるのが一般的傾向である[10]。それはまた、屋敷内付属施設のある伝統的な分棟型の民家形態が、改築によって消失することを意味する。

以上、民家の形態や分布、さらには塀などの特徴を整理した。第９図は、1400戸以上の民家を検討して、最も顕著に確認された民家形態（間取り）・屋敷内付属施設をモデル化したものである。主屋は寄棟造りのセメント瓦が多く、便所・風呂場・納屋・家畜小屋などの付属施設は切妻造りが多い。ヒンプン（目隠し塀）は、スラブ造り民家を除く９割以上の民家で確認された[11]。



第９図　国頭村の平均的屋敷内配置図（1988年）

５．おわりに

戦後の沖縄は、米軍施政権下における軍事施設の立地や商業地域の形成、復帰後にみられた観光リゾート産業の展開によって、　　大きな変貌を遂げ　た。人々のライフスタイルも大きく変化し、農村集落においてもコンクリート造りの民家が増加するようになった。このような社会変動の中で、沖縄本島で古い民家景観・集落景観が卓越しているヤンバル地域においても、これまで以上に地域の景観が変わっていくことが予想される。今後は、本稿で検討した1988年の集落景観の特徴を踏まえ、20年後の景観変容プロセスについて、住民の環境認識との関わりで検証していきたいと考えている。

［付記］本稿の骨子は、1990年６月30日に行われた立正地理学会例会（於・立正大学）、2001年７月７日（土）に行われた第20回沖縄地理学会大会（於・琉球大学）において発表したものである。本稿では、特に屋根材料に関しては、沖縄国際大学総合文化学部の上原静助教授に御教示いただきました。また、本年３月に退職される仲地哲夫教授には、集落研究の重要性について、いろいろ御教示いただきました。記して感謝申し上げます。

【注】

(1) 木内信蔵編『都市・村落地理学』朝倉書店、1967年。

(2) 有薗正一郎他編『歴史地理調査ハンドブック』2001年、古今書院。日下雅義編『地形環境と歴史景観』古今書院、2004年。

(3) 仲松弥秀著『神と村』1975年、伝統と現代社。田里友哲著『論集 沖縄の集落研究』1983年、離宇宙社。小川徹著『近世沖縄の民俗史』1987年、弘文堂。

(4) 本稿で提示した資料は、1988（昭和63）年度の立正大学文学部地理学科に提出した卒業論文「沖縄本島北部地域の集落地理的考察」の一部である。なお、本稿の調査方法に近い研究事例としては、坂本磐雄著『沖縄の集落景観』九州大学出版会、1989年がある。

(5) 前掲（3）田里友哲著『論集 沖縄の集落研究』1983年、離宇宙社。

(6) 住宅地図を基に主屋の方位を確定していったが、厳密に主屋の方位を確定することは難しいと判断し、４方位にまとめて地図化した。例えば、実際には南南西の方位であったとしても、第４図の地図にあるように、南の方位が示されるように地図化してある。但し、各集落の個別の住宅地図には、屋敷地すべてに矢印を示してあり、本稿ではこの一部を紹介してある。

(7) 南向き民家の多くは、実際には「南西向き」が多い傾向にあった。沖縄では、一般的に、民家の向きは真南から少し西側にそらす傾向が多いとされる。

(8) 北向き・東向きの民家の多くは、入口付近から南風を入れるような工夫をしたり、冬季の北風を防ぐために屋敷林や塀を高くする工夫が随所に確認された。

(9) 本稿では、「民家の構造」に関する建築学的な分析は省いており、民家を集落景観を構成する要素として分析している。

(10) 塀材料と屋敷林の分布調査では、ブロック塀と雑木（植生）がセットになっているケースが多くあった。この雑木はフクギなどの屋敷林と違い、塀をつくって後に植えられたものが多いので、第４表にはブロック塀としてカウントしてある。また、塀材料が混合のものもあるので、本稿では主屋の前面の塀材料を取り上げてカウントしてある。

(11) コンクリートのスラブ造り民家では、木造家屋を壊して建て替えたものが大半であり、屋敷林の伐採と並び、目隠し塀（ヒンプン）は新たには建築しない傾向にある。